

文学館だより

令和 4年 4月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982 - 68 - 9511
文 責 日 高

長い冬がようやく終わり、牧水のふるさと山桜の季節を迎えました。
牧水が愛した山桜は、今も変わらず薄紅色を届けてくれています。
新年度を迎え、顕彰会（兼文学館）事務局に異動がありましたので、お知らせいたします。

新任	事務局長	黒木 孝利（令和4年度～、平成27年度～30年度）
退任	事務局長	三浦 元生（令和元年度～3年度）

このたび、三浦元生前事務局長の後任として事務局長に就任することになりました。
先人たちが紡いでこられた牧水顕彰の思いを引き継ぎ、微力ではありますが、顕彰会のさらなる発展に努力いたす所存でございます。どうぞよろしくお願いいたします。
事務局長 黒木 孝利

令和4年度事業・企画展のお知らせ

日 程	主 な 内 容
～ 5.29(日)	企 三浦家寄贈資料公開展 繁と敏夫 - 受け継がれた二人の絆 第3期 敏夫と喜志子
6月～7月	画 榎倉香郵作品展
8月～11月	「文学ノート拝見」展
12月～2月	展 第27回若山牧水賞
3月	牧水全国歌碑めぐり
4月～8月	第12回青の國若山牧水短歌大会作品募集 ○一般の部 自由題、題詠『声』…… 全国どなたでも応募できます。 ○小学生、中学生、高校生の部 …… 県内の児童生徒が応募できます。 ○選 者 伊藤一彦 一般の部(自由題) 大口玲子 一般の部(題詠「声」、小・中・高校生の部) ○応募締切 8月12日(金)
8.20(土)～21(日)	第12回牧水・短歌甲子園
9.17(土)	第72回牧水祭

詳細が決まりましたら、お知らせいたします。
場合によっては変更があるかもしれません。随時お知らせいたします。

求む！ 牧水顕彰会会員

私たちと一緒に牧水の足跡を後生に伝えていきませんか

日向若山牧水顕彰会は事務局を若山牧水記念文学館に置き、若山牧水の偉業・足跡をより多くの方々にお伝えすることを目的としています。本顕彰会は、昭和26年に結成され、70年という歳月を重ね、一度も途絶えることなく今に引き継がれています。

会の目的に賛同される方、会の事業を援助される方は、ご入会をお願いいたします。

【会費】正会員（個人） 年額 1口 1,000円（1口以上）
賛助会員（法人） 年額 1口 10,000円（1口以上）

【特典】1 会員証を発行し、会報「みなかみ」をお届けします。
2 若山牧水記念文学館への入館料が無料となります。
3 関連行事の案内等、牧水顕彰情報を提供いたします。



その他、詳細につきましては若山牧水ホームページをご覧ください。文学館までお問い合わせください。私たちと一緒に、牧水の足跡を後生に伝えていきませんか。

牧水が生まれた里の短歌会うぶ声あげて四十年に

黒木 金喜さん

夕刊デイリー 3月16日掲載



『尾鈴短歌会』が文学館を会場に、詠草会を開きました。

投稿作品を一覧表にし、一首ごと読み上げます。
 作者は、作品の背景などを述べます。
 全員で批評や感想を述べ合い、その後添削する作品もあります。
 最後に、「館報とうごう」への掲載作品を決めます。

作品1

久々に寒の雨降り冷え込みし来たる神門の山に雪積む 本多 茂雄さん

Aさん：「来たる神門の」は、「神門に来れば」がよいのでは。

Bさん：「来たる神門は」がよいのでは。

久々に寒の雨降り冷え込みし来たる神門は山に雪積む と改作されました。

作品2

黎明の光背にして黒々と空に映えたつ冠岳 東村 吉市さん

作者：「冠岳」だと字足らず、「冠岳かな」だと字余りになる。

Cさん：「冠岳は空に映えたつ」と入れ替えたらどうだろう。

黎明の光背にして黒々と冠岳は空に映えたつ と改作されました。

このように、1首1首を全員で丁寧に読み込んでいく光景が印象的でした。



『尾鈴短歌会』

1984(昭和59)年 発会

会員数 10名

月一回 詠草会開催

牧水に関心のある日向市民の方
入会をお待ちしています!

尾鈴短歌会の皆さんのように、文学館で詠草会をしたい、牧水のうたを歌いたい、牧水のうたの書道展をしたい、牧水勉強会をしたいなどなど、ご希望のサークルはございませんか。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

山ざくら散りのこりみてうす色にくれなみふふむ葉のいろぞよき

大正11年3月末から4月初めにかけて、牧水は静岡県にある湯ヶ島温泉ゆがしまに出かけています。「附近の溪より山に山桜甚だ多し、日毎に詠みいでたるを此処にまとめつ。」として、「山ざくら」23首を詠んでいます。大正11年とは、1922年。ちょうど100年前の今頃、これら23首は詠まれたのですね。

牧水『自歌自釈』より

「私は山桜の花を好む。すべての花のうち、最もこれを愛する。ついでに言うておくが、都会住居の人などにはこの山ざくらの花を知らずにいる人があるかも知れぬ。(略) 花の色は近寄って見れば先ず殆ど純白だが、少し遠のいて眺めるとその純白の中に何とも言えぬ清らかな淡紅色を含んでいる。花のさかりは極めて短く、ほんの二日か三日で褪(あ)することなくして散ってしまう。散りはじめたとすればそれこそ一寸の間をもおかないではらはらはらと次から次に散り次いで程なく若葉のしめやかな木となってしまうのである(略)」